

「正義は近い」

イザヤ書 五一章 四〇—一節

南山教会 一〇二五年一月三〇日

大塚 勲

明けの明星、それは、夜が明ける前に東の空に輝く星です。長くつらい夜は終わる、これから朝が来る、と教えてくれる夜明けの星。長い苦しみのときは終わるよと昇つてくる星。それが明けの明星です。

そして、私たちはこの星を見るためには、夜を過ごし、待つ時間が必要だということに気づかされます。空が明るくなつてしまえば、明けの明星は見えません。暗さのただ中で、じつと空を見上げ、光を待つときのこと、その輝きに気づきます。夜明け前の空が一番暗い、けれどもそれは、希望が近いことをあらわしています。アドベントはまさに、「待つ時間」です。忙しさの中で立ち止まり、光を探し、神さまの約束の言葉に耳を澄ませるとき、私たちの心にも小さな光が見えてきます。聖書は、イエス・キリストのことを「明けの明星」と言っています。一人ひとりの心の中にも、明けの明星のように喜びを告げるイエスさまが来られる、そのときまで、聖書に書かれている神様の言葉、預言の言葉を心にとめていなさいと言っています。それは、暗いところに輝く灯、今日、ともしてくれたローソクの光のようなあたたかい灯です。わたしたちは毎日、いろいろなことで傷つきながら生きています。戦争が起きている同じこの世界の中で、人の命が傷つけられ、奪われている現実に胸が痛みます。また、私たち自身も、他の誰かと比べられたり、「だめな奴だ」と思われたり、わたしたちの命や存在が軽んじられてしまうことで深く傷つくことがあります。誰かに怒られたり、悪口を言われたりすることもあります。ありのままの自分ではいられず、差別されたり、仲間外れにされたりして、胸が苦しくなることもあります。また、私たち自身が、他の誰かを深く傷つけてしまうこともあります。真っ暗闇の中で、もうどうやつて生きていったらいいのか分からなくなる時、心の中にイエス・キリストを思い起

こしたいと思います。暗いところに輝くローソクの光のようにイエスさまを思い起こします。イエスは、私たち一人ひとりの存在を大切に愛してくださる方です。ボロボロに傷つき、弱りはてた人にそっと手を置いて「あなたは大事な人だよ」と癒してくださいました。差別されている人、仲間外れにされている人と一緒にご飯を食べました。そして、イエスもまた、弱い、貧しい、ボロボロの小さな赤ん坊として、私たちのところにおいてになりました。私たちは、苦しみや暗闇のただ中に立たされるときがあります。しかし、その暗さの中でこそ、心を静め、祈り、光を待つとき、ほんの小さな光にも気づくことができるのです。明けの明星が昇るよう、待つ者の心にそっと光が現れます。

私たちは、ただ時間が過ぎるのを待つのではなく、神さまがくださる光に気づくために心を開きながら、このアドベントを過ごしたいと思います。

アドベントは待降節と書くように、「到来を待つ季節」です。しかし現代社会の中で、この「待つ」という行為はどんどん難しくなっているように感じます。昔は待てていた事柄も素直に待てなくなってしまっていると感じます。たとえば手紙についてです。私たちより上の世代は、手紙を出せば相手に届くまで数日、返事が届くまでには一週間ほど待つことになります。海外となれば更に長い時間をまつことになります。先日、椋先生が、じぶんへのクリスマスプレゼントだといって、ポーランドのメーカーのカエルが沢山印刷されたセーターを購入していました。到着まで一ヶ月ほどかかったのですが、毎日のようにポストを開けしめしていた姿を思い出します。

待つ時間は、決して無駄な時間ではありませんでした。

「今どうしているのだろうか」「どんな返事をくれるだろう」と、相手を思いながら過ごす時間でした。待つことは、思いを寄せる事。待つことは、心を向けることなんです。

ところが現代はどうでしょうか。わたしが手紙の書き方を学ぶ年齢になつたころにはメールやSMSやLI

NEなどのメッセンジャーが多くもちいられていました。スマートフォンを使えばメッセージは数秒で届き、数分、既読がつかなければ不安になり、荷物が翌日に届かなければ不満が生まれ、映画を倍速で見る時代です。ワイファイの不具合で、再生に数秒かかるだけで「遅い」と感じることすらあります。現代は「待たなくていい世界」に、あまりにも慣れてしまったように思います。そしていつの間にか、「待つこと＝価値が低い、無駄」という感覚に染まってしまいました。

いまの社会を特徴づける言葉の一つに「タイム・パフォーマンス」があります。若者言葉でタイパといいます。時間から最大の成果を引き出すこと。効率化、生産性、スピードが求められる世の中です。もちろんそれらには良い面があります。私たちの生活を助け、便利にし、働き方にも自由をもたらします。しかし、その価値観だけで世界を見ると、「待つ」ことが最も価値のない行為に見えてしまいます。けれど聖書は、まったく逆を語ります。待つことが、信仰の姿だというのです。

本日の聖書箇所において預言者イザヤが語った「わたしの正義は近い」という言葉は、「すぐに結果が出る」という意味ではありませんでした。当時の南ユダ王国はバビロン捕囚という暗闇のただ中にありましたバビロン帝国に討ち滅ぼされてしまったのです。国を失い、希望を失い、祈りが空しく響くような日々でした。そのような状況に向かって、神は預言者を通して語ります。

「わたしの正義は近く、わたしの救いは現れ、私の腕は諸国の人を裁く。」（イザヤ五一・五）

今は暗闇かもしれません、けれども、神の正義と救いは近い。このように民を勇気づけます。捕囚の民がそこから回復に至る道のりは、長く、困難で、時間のかかるものでした。しかしその待つ時間は、神が共におられる時間でした。暗闇の中を歩くような、変わらない現実の只中で、神の約束を手放さずに待つ。これがイザヤの示した信仰の姿です。待つ時間は、ただの空白ではありません。待つ時間は、「神に思いを寄せる」時間なのです。

「いま、この状況に神はどのように関わってくださるのだろうか。」

「神はどのように働き始めているのだろうか。」「神の正義はどのように現れるのだろうか。」

そう問い合わせながら、心を向ける時間。神の方向に思いを向けることで、信仰は深められていきます。

アドベントは、早さや、効率や生産性といった世界の価値観とは逆のメッセージを語ります。

神は言われます。「わたしの正義は近い」。「近い」という言葉には、時間的にあと少し、という意味とともに、神が今、「あなたの隣に立っている」という空間的な近さを含む言葉です。

つまり、状況が変わる前に、神はすでにあなたに近づいている。光が見える前に、救いは始まっている。しかし、その“近さ”に気づくためには、心が慌ただしく駆け回っていては受け取れません。待つ時間の中で、心が少しづつ静まり、神の近さに気づくようになるのです。

だからアドベントは、忙しい私たちの生活に、あえて「待つ」という恵みを取り戻す季節です。

待つことは、神の働きを信頼すること。待つことは、救い主の訪れを思い続けること。

そして、待ちながら希望が育ちます。暗闇の中でも、まだ何も変わらなくても、救い主は近い。だから私たちには、焦らず、あわてず、神の働きを信じて待ちつづけたいのです。

アドベントは、その信仰の歩みを新しく始める季節です。

イザヤは最後にこう告げます。「主に贖われた人々は帰ってきてよろこびの声をうたいながらシオンに入る」
(五一・一一)。

これは捕囚という暗闇からの解放の約束であり、私たちにとつてはキリストの誕生と、再臨の希望への約束です。待つ者には、やがて喜びが訪れる。

待つことは、失われた時間ではなく、喜びへ至るために神が与えてくださる恵みの時間です。

暗闇のような時代であつても、神の正義は確かに近い。その恵みを覚えたいのです。